

ものだ。

この一篇を私は書きつづけるとともに、私のこの人生記録は永く一冊をなすだろう。

いま私は運良く畳の上にいるし、親子三人が一緒に暮らしているが、何一つ持たない、撫順を出たときのままだ。毎日を辛抱しながら福岡で暮らしている。

当時を偲びながら引揚一周期にあたりこの一篇をつづる。

## 追記

苦しい生活の中、善良に生き伸びんとする引揚者のために、そして民主日本の再建にまったく裸一貫より男らしく立ち上がろうとする引揚者のために、苦しみ、いわゆる死線を越えて帰ってきた人々のために、これらの人は、これらの人々の気持ちは、いかなる影響を社会に及ぼしているか。

ヤミ商売は引揚者だという。そしてすべての方面において引揚者という言葉を書かれた人はどんな生活をしているか、どんな気持ちで暮らしているか、世の引揚者があの苦しい体験を生かして祖国日本の再建、民主日本の

発展のために戦いぬかんことを希望する。

二十二年七月十日夜

この書は一個人の小さい日記にすぎないが、私の今は亡き主人中島留蔵が子供達のためにと記しておいたものであります。

## 満州での死の逃避行

(子どもの霊に捧ぐ)

北海道 中村 久尚

私は昭和十五年十一月に甲府第四十九連隊を除隊と同時に満州への農工開拓移民に応募し合格したので翌十六年妻を娶り同年十二月十四日と記憶しているが、確か大東亜戦争の始まった直後だった。

全国各地より集まった人達と満州牡丹江省東寧河沿第一十五野戦兵器廠に軍属として勤務を命ぜられ農地二町歩を与えられた。

この農耕に付いては満人農家に委託し収穫物は部隊で

買い入れてくれることで河沿地区に入地した。我々の部落は十戸三十人ほどの小さな部落だが誠に平和な静かな日々を送っていたが二十年八月八日だったかいつもの通りの出勤で宮門をはいった八時ちよっと前だったとき突然ソ連軍の飛行機の襲来と機銃掃射とで上を下えの大混乱となった。

既に幾人もの負傷者は出る。その中を兵舎に入るや上官命令により家族のある軍人軍属は直ちに家に帰り一装用軍事軍装になり、家族は一足たりとも外に出さぬよう戸締りして一時間以内に隊に集合せよとのことだった。

これは出勤ではなく戦時出動だった。家族にはこの次の第をよく言い聞かせて帰隊し、軍の指揮下にはいつたが数時間後また命令が出て、家族ある軍人軍属は家族全員を直ちに隊の地下弾薬庫に収容せよとのことだった。

この頃はもう飛行機の姿はまったくなかったので家族の収容は容易だった。急いで家に帰り女子供を全員隊の地下弾薬庫に収容し終えてほっとする間もなく、今度は大きな戦車が五、六台肉眼で良く見える位置まで侵入して来た。

我々も渡された三八歩兵銃でこれに応戦を続けてみたものの、戦車に小銃ではどうにもならず、このままでは我々もやられるし、地下庫の家族も敵の手に掛かりなぶり殺しにされてしまう困ったことだがと心配していたときだった。最後の部隊命令として軍属は家族のはいっている弾薬庫を手榴弾で爆破し、男達はソ連軍に応戦すべしとのことだ。

我々は渡された手榴弾を数個庫内の家族達に向けて投げ込んだが、まったく破裂せずにただ家族の「痛いよ」の声だけだった。庫内は真っ暗なので中の様子が全然解らないが、投げ入れた手榴弾が発火せず女子供にぶち当たっているのだ。「これは駄目だ手榴弾はみんな湿けているのだから駄目だ。早くせんと戦車が来たら終わりだぞ」。仕方ないから小銃で乱射して、人だけ殺そうと決めて決行に入ろうとしたとき、幸か不幸か庫外通路の片隅に置いてあった非常用のカーバイトランプが男達の目に入った。「オイこれでは駄目か」ということになり「よしやってみよう、このガスでみんな死ぬかも知れんぞ」ということで六、七本あったランプ全部に火を付けて、「早

く殺して」と叫ぶ女子供達に、今度は大丈夫だからと言  
い残して、三重の扉を全部閉めて表に出たときだった。

軍人家族達の入ったもう一つの弾薬庫が爆破されて大音  
響とともに黒煙が上がるのが見えた。私達も家族が早く  
静かに死んでほしい、と願いながら、数時間敵対行動を  
続けたが、家族の様子が気になるし日暮れも迫って来た  
ので、弾薬庫の様子を見に行くことにした。

みんな恐る恐る一枚ずつ扉を開けて三枚目の扉を開け  
てまた驚いた。中は大騒ぎだ一人も死んでいないではな  
いか。女達にきくと一時は苦しいときがあったので今度  
こそ死ぬると思ったのに、カーバイドが燃え切れたか  
次々に消えてしまったとのことであった。

もう万事窮す、仕方なく全員を連れ出して山へ逃げる  
ことにし全員で二時間歩いたので、一里くらいは山奥へ  
入ったと思うところによっとした広い場所が見つかつ  
たので、そこで休息して善後策をみんなで話し合った結  
果、家族の多い家庭や老人のいる家族は此の場で自決  
し、若い家族の少ない健康な人達は、逃げ延びられるだ  
け逃げ延びるということになり、家族の多い橋内さんや

鈴木さん身体の弱い伊佐山さん達は良しと言うが早いか  
家族も全部向い正面に立たせ小銃で一人ずつ撃ったので  
あった。

そんな物凄い寸時の光景を身とどけて、我々若い六家  
族はその夜の内に次の安全地帯を求めて出発したのだ  
が、私より一つ年上の上重君には三歳になる男の子が一  
人おり、妻君は満臨月のお腹だったので、三歳の子供を  
この場で愛の手に掛けてしまった。子供づれは私達だ  
け。一歳の女の子だった、死ぬときは一緒にと心に決め  
て背負って出発した妻と代る代る背負い続けての毎日  
だったが、子供が至極達者で元気だったのが救いだっ  
た。

その夜は一晚中山の中を歩き回って、ひとまず安全ら  
しい場所に着いたときは、すっかり夜も明けて静かな朝  
だった。昨夜のあの出来事が信じられないくらい静かな  
夜明けだった。

ここで暫らく休憩して行くことにして、横になったり  
寝ころんだりして休んでいたとき前に一寸書いた上重の  
妻君が産気付いて苦しみ出したのには驚いた。みんなの

女達が手伝って取り上げ生まれた子供はすぐ穴を掘って埋め、みんなから手拭い等を集めて産後処置した上、暫らく休んで出発することにした。

上重君達は無理だろうから後からくるよう話したが、みんなに迷惑はかけないので是非一緒に連れて行ってくれと言う。ここへ二人だけおいていかれたら死ぬということだ頑張るから一緒に連れて行ってくれと泣かんばかり一時だけ休んで後に出発することで全員合意。いよいよ出発したが、未だ妻君は下半身血みどろだった。ほとんど上重君が背負っての数日だった。私も出来る限り休憩を長い目にとりながらの南下だった。上重君も大変だし、妻君も出血が仲々止まらないというので、二、三日で駄目だろうと思ったが、何と一緒に引揚げたことを書き添えておく。それから重本君を含む私達は、深山で生活が六十日続いた。毎日五里くらい南下することに決めて、太陽を目当てに吉林市の方向を目標に歩き続けた。食べ物はデンデン虫と百合の根とが常食だった満州の深い山にはカタツムリは非常に多くいるのでこれをつぶして肉を取り出し、百合の根や雑草とを一緒に煮て食べる

毎日だった。マッチや塩がなくなると、満人の部落を探して二、三人で押し込み盗んではまた山へ帰っての生きざまだった。

夜の行動と昼の行動は同じくらいだった。八月九日に山に入り、十月四日の最後の襲撃を受けて手を挙げて甲へ下りるまでの二か月の間に大小八回ほどの満人達の襲撃を受けたが、その都度何人かづつ殺された。

最後に残った同志は八人になってしまった。私も十月四日の最後のときにととう子供を亡くしてしまった。本当に残念だったし子供には申しわけなかった。

私達が十月四日受けた最後の襲撃の終始を書いて送りたいと思う。この頃は途中で出逢った兵隊さんと私達八人とで十三人ほどの集団で行動を共にしての毎日だった。十月三日だったこの日は兵隊と私達とで満人部落へ徴発に出かけたのだが、途中の畑の中に牛が四、五頭いたので、中の一頭をつれて帰り大分山奥にはいったと思われる良い場所での牛を殺してその肉を焼いて食糧としました山奥にはいることにした。

この日は朝の内初雪がちらちらと降り一面ざつと白く

なったことでもあり、大分奥でもあり襲撃もないだろうと決め込み兵隊達は早く肉を食いたいと、もう牛を殺して料理が始まった。私もみんなで薪集めをし火をたいたりしてたちまち焼肉の山が出来て、袋や雑のうなどにつめ込めるだけつめ込んで久しぶりに食べ放題食べて、女の人達は天幕などを広げて思い思いの話に花を咲かせたり、道中の苦勞話に夢中の組もあった。また男達も久しぶりのご馳走に満足しながらこれからの行動について話合っていたとき、突然パンパンと右前方の小高い山の方向から銃声三発ほど撃ち込まれた。みんな飛び上がって驚いた。それ火を消せ、荷物を持って山の中へ逃げろ、の大きな声になった。

一方妻と向い合って子供を真ん中には喜んで楽しそうに話し合っていた牧内さんの奥様に最初の一発が当たったのだ。ぶつという音と同時にうーんといったきりで奥さんはまったく動かなくなったのだ。

家内も自分に当たったと思ったのか、腰が立たなくなつて困っているし、私は眠っていた子供を抱きかかえたと妻の手を引いて、木立の多い山の中へ引き込もうと

するが、眠っていた子供を急にさあつと抱きかかえたのでびっくりして泣き止まないの、敵の銃弾は泣き声を追ってパンパン撃ってくるので、これはいかんこんなことをいつまでも続けていたらみんな殺されてしまう。「みんな早く逃げてくれ。俺達はここで死ぬから早く行け」と言いつつ、私は決心した。子供も妻も他人の手によって死なせはしないぞと言ひ聞かせながら子供を手にかけてしまった。泣き声がやんだとき銃声もなくなった。子供は死んでしまった。山の中は気味悪いほど静かになったのだ。

さあ今度は自分達だぞと、自決用に肌身はなさず腰に結び付けていた手榴弾を取り出します妻からと思ひ安全弁を抜いたが、どうしたことかこれを打ち付けることが出来ない。一体どうしたことだ。このとき一発の銃声がきこえたら一気にたたき付けたらうに駄目だ。死ぬない。何と情けないことだろう。妻もやつと正気に戻り、父さんどうしたの早くと言っているのに、気持ちも手も動かない。ただ茫然と立ちつくすだけであった。まさに生死とは紙一重の違いを、身をもって味わったのだ

た。可愛い子供を手に掛けてしまったのに自分達は死ぬ  
ない。そんな馬鹿なことがと二人ともただただ茫然と立  
ちつくした数時分。二人がやっと我に返り顔を見合わせ  
て、これからどうしたら良いのだ。子供には取り返しの  
出来ないことをしてしまつたのだ。二人の親は言葉もな  
く近くの松の根元を手と棒で穴を掘り、子供を埋めるの  
が精一杯だった。そのとき山の中はもう真つ暗だった。  
ここにいる限りいずれば狼たちの集団に襲われることは  
時間の問題だ。そんなことを考えながら、何げなく前方  
を見つめた日は、うつつすらと降つた雪の上にみんなが逃  
げて行つた足跡が見えたのだ。そうか子供には申し訳な  
いことをしたが、許してもらい次の死ぬるところまで行  
くことに決心して、また妻と二人うすい月あかりを頼り  
に薄雪の中の足跡を目当てに、同志の後を追うこと二時  
間ほどもたつた頃、遙か前方にホタルの先ほどの灯が、  
ぼつんと一つ目にはいったので、喜びと不安とで近づい  
て、二百メートルほどはなれた所に妻を待たせて、一人  
で静かに近づいていった。畑の中の監視小屋だった。犬  
がいると困るなと思ひながら、だんだん近づいてゆく

と、日本語での話し声が聞こえてきたので、入口近くま  
で寄つて話し声を聞くとまさしく同志達の声だった。

入口の建戸を上げて、俺だよと声をかけると、兵隊は  
既に銃を向け撃つ身構えだったので、中村だーと言つて  
これを制して中へはいり、一部終始を話した上で、待た  
せて置いた妻を連れてきて皆に逢わせた。子供のことで  
みんなから同情も受け、これからの励ましも頂いてホッ  
としたものの、子供と牧内の奥様を失つた淋しさは、強  
いショックとなりみんな言葉少ない一時だった。折角み  
んなで苦心して求めつゝた食べものも荷物も、殆んど  
置いて逃げて来たので、また着のみのままの出発に  
戻ってしまったのである。更にみんなの話を聞いて困つ  
たことは、この小屋に一人でいた満人を兵隊さんが殺し  
てしまったということだった。

もう夜明けも近いことだ。朝になると満人の家族が朝  
食を持ってくるだろうから、暗い内にこの小屋から出来  
るだけ遠くへ逃げないと危険である。畑の黍など焼いて  
食べ、またみんなで山へ逃げ込み、一晚中山の中を歩き  
回つての末うす明るくなって驚いた。みんなしてアツと

声を出すほどびっくりして私はそこへ座りこんでしまった。

一晩中歩いてだいぶ山奥へ来たと思っていたのに、目の先に黄金の色づいた稲田が見えるのだ。山の突端に出てしまったのだ。どうしようということになった。昨夜は番人を殺してきたので、後ろへは戻れない。今頃その部落では大騒ぎしているだろう。

いよいよ万事窮すだ。われわれ軍属は前方部落へ手を挙げて出ることにしたが、兵隊達は関東軍が来るまで頑張るんだ、と言って山の方へ向かって去って行った。私達は出だしから今日まで肌身はなさず持ち歩いた自決用手榴弾まで畑を掘って埋め、まったくの避難民となり部落へ下りて行った。田畑で働いていた人達は匪賊でも出たかのごとく大騒ぎしながら家の方へ逃げて行くので困ってしまい、撃ってこられたら大変なことになるので、「違うんだ」と呼び止めながら、みんなその場に座って両手を高く上げて助けを求めたので、分かって大勢が近寄って来て話を聞いてくれました。朝鮮の人達が稲を刈っていたのである。

早速部落へ連れて行かれて身体検査を受け、金目ものは全部取られたが、六十日ぶりに米の飯を食べさせてくれ、本当にうれしかったし、おいしかった。誰となく、もうこれで死んでもいいよ、そんな声が一、三の者から飛び出るほどの実感だった。それから暫らくして、満人の世話役のような人達に引き渡され、今度はその満人達に、私達をソ連軍の司令部に引き渡すと言って、その日の内に出発し、その夜は途中で一晚野宿し、次の日の昼頃本当にソ連軍に引き渡された。そこに日本人の若い通訳がいて、日本の表情をくわしく知らせてくれた。

戦争の負けたことを、この時点で始めて知ったのである。私達は、この司令部に二日ほどいて、目標の吉林市の日本人収容所に入れられた。それから二十一年十一月の引揚時までみんな頑張ったが、まことに残念なことに、同志で一番元氣だった水関君夫妻が収容所で発疹チフスで死んだことだ。さてこれから引揚るまでの一年は絵筆に書き現せない生活の苦勞が続くのであった。